
脱げない制服

たまも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

脱げない制服

【Zコード】

Z9345M

【作者名】

たまも

【あらすじ】

ゆかりは高校生になつたが制服は気に入らず…

脱げない制服

ゆかりは4月から高校生
本命の公立校に行きたかったが残念ながら滑り止めの私学に
入学することになった。

「あーあ かわいい制服着たかったな・・・」
ゆかりの入学する予定の高校は紺のブレザーにジャンパースカート
赤のネクタイと

いまいち人気のない制服であった。

「あっちの高校はかわいいセーラー服だったのに・・・」
そして入学式の朝

吊るしてある新品の制服に初めて袖を通す時がやつてきた
「やつぱり ダサイこんな着たくない」
そうはいつても着るしかないのだが・・・

最初はカッターシャツを着た

ゆかりは中学の頃はセーラー服だったので白のカッターシャツを着
るのは

初めての経験だった

「第一ボタンはとめたほうがいいのかな・・・」

そういうえば制服の着方というプリントをもらっていたな・・・
最初の内はそれでいつておくか

プリントには

シャツのボタンはすべてとめること（第一ボタン カフスボタンも
必ず）

ネクタイは必ずする事

ブレザーのボタンはとめる事

と書いてある

ゆかりは第一ボタンをとめた

「ううつ 結構苦しい！」

さらにゆかりの首に合わせて採寸されたゴムを調節されたネクタイがゆかりの首を締め付けた

ネクタイはゴムと金具でとめるワンタッチ式のものであったがゴムは伸ばせないようになつていて ゆかりの首元にしつかり食い込んだ

「苦しい 我慢できない」

しかし入学式早々校則を破るわけにもいかないのでゆかりは苦しいながらもジャンパースカートとブレザーを着て部屋を出た

「お母さん 首元苦しいんだけど」

「もう少し緩めてみたら」

母親はそういったが

ネクタイのゴムは今より伸ばせないようになつている

「無理みたい 田一杯伸ばしてこれだもの」

「我慢しなさい すぐ慣れるし よく似合つてているわよだらしないよりきちんと締めたほうがかわいいわよ」

「もう ひとつ」とだと思つて 行つてきます

ゆかりは家を出た

入学式も無事終わり

ゆかりは家に帰つてきた

「あー苦しかった 早く制服脱いど」

ゆかりはブレザーの前ボタンをはずそうとしたが なぜかはずれないあれ布に引っ掛けたかな

しううがないのでネクタイを先にはずそうとしたが金具がはずれない

「なんで・・・」

「お母さんへ 制服脱がして~」

「いい さつ きまでいたのに

しううがないゆかりはベットに横になつた

そのうちお母さんも帰つてくるだり

そのうちゆかりは眠りについた・・・

ゆかりは田観めた

あれ ここは・・・

教室

「ようこそ 南井ゆかりさん」

後ろで女の声が聞こえた

「誰！」

「私はあなたの担任の丸山です」

そこには40歳前後の女性が立っていた

「これから三年間毎日この学校で制服に懲悔してもらいます
もちろん家には帰れません」

なにをいっているのか ゆかりは訳がわからなかつた

とつあえずここから逃げ出そう

ゆかりは怖くなつて一目散に校門に向かつて走り出した
門まであと少しの所で 制服がゆかりの体を強烈に締め付けた

「あやあああ！――！」

首 手首 腰 制服が強烈に締め付ける

ゆかりは痛さと苦しさでのたうちまわつた

「その 制服を着てている限りこの学校から出られませんよ」

丸山がそういった

しばらくすると締め付けもなくなり ゆかりは息を切らしながら
ゆっくり立ち上がつた

「ここは どこなんですか？」

「家にかえりたい・・・」

ゆかりは泣きそうな声で丸山に尋ねた

「君が制服を着たくないと言つたから 制服が怒つて異世界に連れ
込んだんです

その制服は君に着てもう乐くるのを楽しみにしていたの・・・」

そんな・・・

「この学校からは出られません 制服を脱ぐ事ができれば別ですが 着ている本人では絶対脱ぐ事は出来ません」

ゆかりは必死でブレザーのボタンをはずそうとした
どうしてもはずれないので力任せに引きちぎりうとしたり
カッターシャツの襟と首の間に指をいれて第一ボタンを引きちぎりうと

したがまったく無駄だつた ネクタイもきつちりゆかりの首周りに
食い込んではずすことは
どうしても出来なかつた

「今日の授業はもう終わりです」

「部屋に案内します」

ゆかりはあきらめて丸山の後ろについて行つた
制服の締め付けの苦しさは一度と味わいたくなかったので
ゆかりは逃げる気力も失つていた

学校はゆかりが通う予定だつた高校そのものだつたが 人の気配は
なかつた

「その他に人はいなんですか？」

ゆかりは尋ねたが丸山は無言でゆかりの少し前を歩いている

「ここです」

丸山が立ち止まつた先に廊下の壁にぽつんと鉄のドアがあり小さな
のぞき窓がついていた

「入りなさい」

ドアを開けて丸山がゆかりを部屋に押し込んだ

「明日の起床は6時です 早く寝なさい」

丸山はそう言つと部屋から出て行つた

ゆかりはドアを開けようとしたが鍵が掛かつていて開ける事は出来
なかつた

部屋は6畳ぐらいでトイレも付いていた ベットと机 洗面台 照

明もあつたが

部屋には窓はなかつた

部屋から出られないゆかりは机の椅子に座つた
普通の学習机だが新品なのか非常に綺麗だつた
机の引き出しを開けてみると小箱がありその中に文房具とはさみを見つけた

しばらくしてゆかりはベットに腰を掛けた

フカフカで寝心地は良さそうだ

横になつてみよう

ゆかりは黒の革靴を脱ごうとしたが脱げなかつた

「靴すらも脱げないの・・・」

ゆかりはこれからどうしていいかわからないのでとりあえずそのま
まベットに横になつた

「これからどうなるんだろう?」

ゆかりは不安でしかたなかつたが疲れていたのか少し眠気がやつて
きた

電気を試しに消灯してみたがドアの小窓からは向い方が暗いのか
こぢらからは見えないようになつてているのか

まったく暗闇でなにも見えなかつた。

ゆかりは電気を点灯した あまりの暗闇で恐怖だつたの
だこのまま明るくしたまま寝よう

ゆかりは横になり目を閉じた

30分ほど目を閉じていただろうか

制服のまましかも靴も履いたままで非常に寝苦しかつた
なかでもネクタイは非常に苦しかつた

せめて少しでも緩められてカッターシャツの第一ボタンをはずす事
ができるば

だいぶん楽だろうがきちんと採寸されたシャツとゆかりの首周りより
少しこそめで調整されていくゴムと金具でとめるネクタイはゆかり

の首を

きつちり締め付けている

「寝苦しい」

ゆかりはふと先ほどの机にはさみが置いてあつたのを思い出した
あのはさみでボタンの糸やネクタイのゴムを切れないかしら
ゆかりははさみを手に取りネクタイのゴムを切ろうとした
その瞬間また制服がゆかりの体を締め付けた

「ぎやあああ！」

制服が急激に小さくなつていくよつな締め付けだ
ゆかりは激痛で氣絶してしまった。

「起きなさい」

その声でゆかりが氣が付くとそこには丸山が立つていた
氣絶してそのまま床で眠つてしまつたのか氣絶したままだったのか
わからないが目覚めは悪くはなかつた

「もう6時です。早く起きて準備しなさい」

「顔を洗い髪をなおしなさい お化粧は禁止です」

ゆかりは洗面所で髪をとかした 髪は少し乱れていて埃っぽい
そういうえばお風呂にも入つてないな

制服を着たままでは入れないけど…

制服はゆかりが床で倒れていたにもかかわらず制服のブリーツなど
もしわにもならず真新しい今まである。

顔を洗つてирる時に袖に少し水がかかつたゆかりは試しに制服に水
を手でかけてみたが水玉になり弾いて濡れる事はなかつた
多分汚れたりもする事はないのだろう

「用意出来ましたか？」

「あなたの専属のメイドを紹介します」

丸山が言つた

メイド…！？

「入りなさい」

丸山の後ろにゆかりと年は同じぐらいだろうか…

可愛らしいメイド服を着た女の子が立っていた

走る

この子はあなたの世話をするかりんちゃんです

「さあ挨拶をしなさい」丸山が言つた

「はじめましてお嬢様これからゆかり様のお世話をさせていただきます

ゆかりは戸惑つたが

「よろしくね」

としか言えなかつたが実際は同学年の子と会えて嬉しかつた

「それでは朝食の準備をしてまいります」

かりんはそう言って立ち去つた

「さああなたは制服に謝つてもらいます」

「とりあえず今日は校庭を走つてもらいます」

「走ると制服に謝ると何が関係あるのだろうか・・・」

ゆかりはそう思つたが言われたままに校庭を走り出した

ゆかりは持久力には自信があつた 中学時代陸上部で長距離を走つていたからだ

走り出してしばらくして汗でシャツが濡れないことに気が付いた
多分 特殊な素材であろうシャツに吸われているのか
シャツの中が汗で濡れるということはなかつた

しかし顔からは汗が噴出してくる

4月とはいえネクタイやジャンパースカート 上着を着ながら

走るのは勝手が違つた 体温を逃がす事ができない制服

「暑い 苦しい」

ゆかりは首とカッターシャツの襟の間に指をいれて体温を逃がそう
としたが

襟がゆかりの首に張り付いているかのようで指を入れる事は出来なかつた

ブレザーの胸元を掴んでパタパタしてみたがまったく無駄だつた

膝丈ぐらいのスカートも捲り上げようとしても上がる」とが出来ない
い・・・
暑さと苦しさでゆかりはその場にしゃがみ込んだ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9345m/>

脱げない制服

2010年10月10日02時23分発行